

## 2. 外山脩造

---

### 銀行検査で活躍、「銀行簿記精法」の会読作業に貢献

#### (1) 概要

外山脩造は、天保13年(1842年)11月10日、越後国古志高波在栢尾郷小貫村(現在の新潟県長岡市小貫)に、父・伝と母・清の長男として生まれた。幼名は寅太、後に脩造と称した。外山家は京都の日野家を祖先とする、代々小貫村の庄屋の家柄であった。明治維新後、慶応義塾や開成学校を経て、明治5年(1872年)に共立学舎を卒業した。

明治6年(1873年)、慶応義塾時代の学友の推薦により、大蔵省紙幣寮(現在の国立印刷局)に任官した。当時は日本で初めての銀行制度確立の礎となる「国立銀行条例」が制定された直後であり、大蔵省では欧米の銀行実務の導入が急務となっていた。こうした中、外山は、大蔵省嘱託であったイギリス人のアレキサンダー・アラン・シャンドが執筆し大蔵省職員が翻訳した「銀行簿記精法」の会読作業に従事し、他の従事者が難解さに苦しむ中で、唯一全書の意味を理解したとされる。外山の学識をもってすれば特に難しいことではなかったが、近代的な複式簿記システムの理解が進んでいない中、外山の能力に対する評価が高まることとなった。

これを受けて、外山は、昇進して銀行課へ異動となった。銀行課においては、主に全国の国立銀行の経営状況に係る検査と立地地域の経済・産業動向の調査や分析を担当した。外山は、第一国立銀行(現在のみずほ銀行(旧第一勧業銀行))の検査も担当し、当時、同行の頭取を務めていた渋沢栄一と面識を持つこととなった。渋沢は、外山の才能を高く評価しており、外山について、「検査に関しては非常に緻密な考えを持っていて熱心であり、かつ自分の信じることは必ず断行する性質の人であった」と評した。

また、外山は、国立銀行の資本配当のための原簿作成においても功績を残した。当時、国立銀行創立の出願が続出したことを受け、大蔵省は、国立銀行の設立を抑制するため、全国の銀行資本金総額等を制限することで設立規制を行うという方針を打ち出した。大蔵省は、外山が作成した全国の銀行資本金総額を人口・税額等で各地に割り振った原簿を基に、地方の事情を勘案した国立銀行の設立指導を行った。

明治11年(1878年)、外山は、大蔵省銀行課を辞職した。明治12年(1879年)、第三十二国立銀行(現在の三井住友銀行(旧三井銀行))総監役に就任した後、明治15年(1882年)には、日本銀行初代大阪支店長に就任した。商業の発達には約束手形の活用が最大の成果を挙げるとの考えから、大阪支店において積極的な手形の割引を開始した。その結果、大阪支店の手形割引量は、明治17年(1884年)には、日本銀行全体の手形取引枚数のおよそ9割、金額にしておよそ6割を占めるほどとなった。

明治18年(1885年)に日本銀行を辞任した後は、2年間の静養を経て、明治20年(1887年)から翌年にかけて商工業視察を目的に欧米各地を周遊した。この視察で得た知見を元に、有限会社大阪麦酒会社(現在のアサヒビール株式会社)、阪神電気鉄道株式会社、商業興信所(明治29年(1896年)に渋沢が開業した東京興信所と昭和19年(1944年)に合併し、東亜興信所と改称)を設立するなど、数多くの事業を手掛け、関西経済界に今に続く多大な影響を与えた。

大正5年(1916年)1月13日、外山は大阪で73歳の生涯を終えた。

## 人物写真

---

外山脩造



(長岡市役所ホームページより 外山家提供)